

令和8年年 3月 3日

「創意と活力」のある学校づくり推進事業報告書

春日井市立 春日井市立出川小学校

校長 仲渡 隆真

<p>事業テーマ</p>	<p>情報活用能力の育成と主体的・対話的で深い学びを支える ICT(PC等)の日常的な活用モデルの確立</p>
<p>取組の目的</p>	<p>本校では平成23年度よりICTを活用した「わかりやすい授業」の実現を目指し、授業改善に継続的に取り組んできました。令和3年度のGIGAスクール構想の実現により、全児童が一人一台のタブレットPCを使用できる環境が整備され、情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」として位置づけられる中、系統的な育成を目指した本格的な取り組みを開始しました。</p> <p>現在は「情報活用能力の育成と、主体的・対話的で深い学びを支えるICTの活用モデルの確立」を教育テーマに掲げ、学習活動の中にICTを自然に取り入れた授業デザインの構築を進めています。令和6年度には、年間35時間の「情報の時間」を通じて、児童が主体的に情報と向き合い、仲間と対話しながら学びを深めていく環境を整備し、ICTの活用をさらに強化してきました。加えて、授業研究会では日々の実践を振り返り、現場の課題をチームで共有しながら改善を重ねています。</p> <p>令和8年度は、こうした基盤の上に、生成AIなどの新たな技術を活用した情報活用能力の育成に一步踏み出します。具体的には、生成AIを活用し</p>

	<p>た情報の要約・比較・分析などの活動を通して、情報を「使う」だけでなく「吟味する・意味づける」力の育成を目指します。また、AIと児童との対話活動を取り入れ、思考を言語化しながら自らの学びを深めていく新しい学習スタイルにも挑戦します。</p> <p>市内各校との連携も引き続き重視し、「情報の時間」のカリキュラムの定期的な見直しとともに、授業実践や成果の共有を通して、地域全体の教育力の向上にも寄与してまいります。</p> <p>今後も本校は、児童一人ひとりが情報社会を主体的に生き抜く力を身につけることを目指し、創意と活力のある教育活動を推進していきます。</p>	
<p>区分 (○印を付ける)</p>	<p><b>新規事業</b>・継続事業（総事業年数 4年間、1年目）</p>	
<p>継続事業の場合、昨年度の課題を踏まえて対応した内容</p>		
<p>事業名</p>	<p>事業内容</p>	<p>実施時期</p>
<p>1 研究推進部会</p>	<p>研究方針・カリキュラム・授業構成等確認</p>	<p>・4月～随時</p>
<p>2 学年部会・低中高学年ブロック会</p>	<p>・学年相互に授業参観、授業検討実施及び活用モデルの集積</p>	<p>・5月～随時</p>
<p>3 公開授業研究会</p>	<p>・各授業研究会において複数クラスの授業公開実施 ・研究協議会実施、助言者から指導・助言</p>	<p>・各学期1回 1学期:6月25日 2学期:9月25日 3学期:2月6日</p>
<p>4 研究開発授業公開</p>	<p>・「情報の時間」の授業公開実施</p>	<p>・10月31日</p>
<p>5 研究開発運営指導委員会</p>	<p>・「情報の時間」について文科省運営指導委員への報告と質疑応答</p>	<p>・各学期1回 1学期:6月25日 2学期:9月25日 3学期:2月6日</p>
<p>6 研究開発フォーラム</p>	<p>・文部科学省にて「情報の時間」に関する内容報告</p>	<p>・1月21日</p>
<p>7 「情報の時間」に関する資料作成等</p>	<p>・カリキュラムの見直し・活用事例作成等</p>	<p>・年度末</p>

## 取組の成果

### 1. 児童・生徒：スキルの向上と探究心の深化

「情報の時間」を通じた一連の取り組みにより、タイピングやクラウド編集、データ分析といった基礎技能が大幅に向上した。さらに、情報を多角的に捉え、生成 AI 等の先端技術も主体的に活用しながら論理的に表現・探究する力が着実に定着している。こうした表現手段の広がり、児童生徒が自ら学び、積極的に発信しようとする学習意欲向上にも大きく寄与している。

### 2. 教員・授業：教科指導の質の向上

ICT の基本操作が習得されたことで、各教科における操作指導の時間を大幅に削減でき、本来の教育内容に注力した質の高い指導が可能となった。また、学習過程を共通化したことにより、特別支援学級等を含むあらゆる場面において、児童が迷わず見通しを持って活動に取り組めるようになり、学習全体の安定感と定着につながっている。

### 3. 保護者：不安から期待への転換

評価の変化：当初あった健康面やモラルへの懸念が、子の成長(Chromebook の使いこなし等)を実感することで、「不安」から「希望」へと変化した。

## 課題

### 1. 授業時間・時数のあり方

クラウドや生成 AI の活用により、学習者が自らのペースで効率的に学習を進める場面が増えたことで、従来 45 分や 50 分といった固定的な授業時間の妥当性を再検討する必要性が生じている。また、情報活用能力の向上に伴い、各教科の学習効率が変化している実態を踏まえ、学年の特性や発達段階に応じた弾力的な授業時数の配分について、継続して検証していくことが求められる。

### 2. 現代的な教育課題への対応

「情報の時間」を通じて、課題把握からアウトプットに至る学習過程を日常化することは、学び方そのものの習得に繋がっている。これは、学習の見通しを持ちにくい児童生徒への支援と

なるだけでなく、学習の個別化や多様な学習者への対応という現代的課題に対する有効なアプローチである。

### 3. 指導のあり方と環境整備

クラウド環境の定着により学習過程が可視化され、児童生徒同士の相互参照や、教員による個々の状況に応じたきめ細かな支援が可能となった。これは協働的な学びを充実させ、指導の質を向上させる契機となっている。今後は、これらの成果を教育課程の改善に結びつけるため、各学校の実態に応じた運用の工夫や、教員間での共通理解、段階的な導入に向けた検討が必要である。